
真剣で私に恋しなさい！～竜舌蘭ルートIfストーリー～

杉岡丘波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！〜竜舌蘭ルートエピソード〜

【コード】

N8883K

【作者名】

杉岡丘波

【あらすじ】

真剣で私に恋しなさいの竜舌蘭ルートを自分なりにご都合主義に変えてしまいました。もしよければ見てください

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエピソード〜 プロローグ（前書き）

少し時間軸があべこべになるところもあるでしょうがよろしくお願
いします

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエフストーリー〜 プロローグ

人生は絶えず川の流れるように流れていく。例えるなら楽しいときは流れが速い急な傾斜のようなものだろう。川が枝分かれしているところは人生の分岐点であるだろう。海に近くなると緩やかになり、死ぬときはあの穏やかな海のように死んでいくだろう。そんな川の流れの中に存在していたかもしれない。小さな小さな分岐点。これはあつたかもしれないもしかしたらの世界。そうエフ^もの物語

「大和!!!」

我らが風間ファミリーのリーダー、キャップこと風間翔一が話しかけてきた。なぜかウキウキして。

「どうかしたか？ キャップ」

「ふと思うんだ。俺……ファミリーのメンバーを増やせばもっと楽しめるんじゃない！」

俺はそのセリフが少し嫌だった。いや嫌だった。俺たちは俺、キャップ、岳人、モロ、涼、ワン子、京、そして姉さん。このメンバーでいいと思っていた。増やさなくていい。……竜舌蘭を護つたこのメンバーで。

「キャップ。俺は反対だな。このメンバーでいい」

「いいや！ ダメだ……」

いつにもなくキャップは真面目な顔していた。そんな顔をした理由が分からないかった。

「俺はこのメンバーでいいと思うがなぜダメなんだ。キャップ」

「まあ俺も好きだ。正直この面子でいいと思ってるけど……俺はやっぱりもつと皆で遊びたいな！」

「そうになったら際限ないだろ？ 戒律を守らないやつが出てくるし喧嘩もするだろうし」

「喧嘩は上等さ！ あと俺は誰も彼も入れようとしてるんじゃない

！ 入団テストをしようと思っている！！」

「……………はあ？」

「ふふふ、これなら文句ないだろ大和！」

「まあ……………」

「俺たちの仲間は固い結束でできている。全員そろえば無敵だ！！でも素質があるのに仲間になれないやつは可哀想って思うだろ！」そんな話が出た。俺は少し戸惑ったがテストをするといっているのだ。それならいいだろう。もともと俺たちのファミリィはなかなか人気もあつたから諦めさせるには丁度いいかもしれない。

「ああ、それならいいぞキャップ」

「よしそれじゃ！ このこと皆に伝えてくるぜ！」

そして風のようにここから駆けていった。それはまだみんなが小学生のころの話であった。みんな無邪気な夢を持ち生きていく時代だ。

この話をする確立は0に等しいが風間翔一はこの話をした。これで川の流れが変わっていく。どんな未来になるかは予想がつかなくなるIfの流れへ

真剣で私に恋しなさい！〜竜舌蘭ルートエピソード〜子供編第一話

「というわけで入りたい奴を募集してみたぞ！」

そこにはずらーつと15人ほどの子供がいた。

「俺は別に入ってもいいや。試験合格したらな」

「俺様は増えなくてもいいと思うんだけどな。いや、女の子ならアリかもな」

「正直僕も増えないで欲しいと思ったけどね……」

「あう自分は眠い……」

「私は別にいいわよ！ 楽しそうだし！ 苛めないで欲しいけど……ブルブル」

「……………あんまり」

「私はどつちでもいいぞー」

そんな感じでどちらでもいい派と否定派ができてしまったが我らがキャップは気にせず話を進めていく。

「ルールは簡単！ 風間ファミリーとこの入りたい人で勝負をする！ そして俺たちに勝ったら入れてやるよ！」

「む、むりだ！ 百代さんがいるんじゃない！ 反則だぞ！」

そうキャップに言うけれどキャップはそんなことお構い無しだ。というかこんな条件無理だから。きっとキャップは仲間を増やす気はあんまりなかったんだろう。

「お、俺は一抜けた！」

「ぼ、僕も！」

どんどんとここから入りたいと言っていた奴らが去っていった。そしてこの公園には風間ファミリーと一人の少女しかいなかった。

「おー一人しかいなかったなー」

そういつてキャップは少女に近づいた。白い肌に白い髪をしていた少女だった。そんな少女にキャップは手を肩におく。きっと帰らすのだろう。でもなぜか俺は仲間に入って欲しいと思った。そう、

一人だけでも勝てない相手だとわかってても逃げずにここにいる少女が……。少しまぶしく見えた。そう思っていたら俺は口に出していた。

「キャップ！俺はその子と友達になりたい！だからチャンスを

」

「さてんじゃ仲間になった記念にみんなで缶蹴りしよーぜー」

「……はあ？」「」

キャップの行動に岳人とモロと一子はポカーンとなっていた。たぶん俺もポカーンとしていただろう。

「キャップ……えつと勝負は」

モロが恐る恐る聞いている。俺もそれは気になっていた。何が勝利条件かさっぱりわからない。

「あーそれはだな。たぶんこういえば根性ないやつは逃げるだろ。

んで残った奴を入れようとおもったわけさ！」

「まあてきぜんとうぼーするやつは風間ファミリーにはいらんか
らな」

「百代さん……パワフルだね」

「だからお前は今日から仲間だ！名前なんていうんだ？」

「こ……小雪！」

「よし！小雪を含めたメンバーで今日は缶蹴りだ！！あ、その
まえにほかのやつらの説明しないとな」

「わたしは川神百代だ！！」

「僕は師岡卓也。みんなにはモロって呼ばれてるよ」

「おれさまは島津岳人だ。女性にモテモテの」

「あいつはバカだから気にしなくていいさ。俺は直江大和だ」

「ヤマトてめえ！」

「でも嘘はよくないと思うよガクト」

「ひでえぜみんな……」

「……椎名京」

「はいはい！岡本一子だよ！ワン子って呼ばないでね！」

「えつと自分は桜樹涼さくらぎじょうっていうんだ。のんびりなかよくやるーね」

「んで最後はこの俺！ 風間翔一かざましょういちだ！ 以上風間ファミリーだ！

それじゃそーだな。ワン子！ お前が今回鬼だ！」

「わかったわ！」

「それじゃキックオフ！」

そういつてキャップが缶を思いっきり蹴り上げる。そしてみんな散らばる。なぜか俺に小雪は付いてきた。なぜ？

「どうして俺のほうにくるんだ？」

「僕慣れてないから強そうな人についていったのー」

小雪は笑いながら俺の問いに答えてくれた。なんか可愛く見えてくるが気のせいだということにしよう。うん、そうだな。

適度に隠れやすい場所を発見して俺たちはそこに隠れることにした。

「そついえば学年つてどこなんだ？」

「えつとー5年生だよ」

「え？ 俺と同じ学年？」

「そうなんだー驚きだね！」

俺と同じ学年？ でも見たことないな……どういうことだ？ もしかしたら違う学校かもしれないし、まあ大丈夫か。

「さてそろそろ仕掛けるか。俺はこっちからお前はあっちから攻めてくれ」

「うんわかった」

お互いに缶に向かって別方向に駆けていく。ワン子がそれに気が付いて缶を踏む。

「大和と小雪みっつけ！」

「あつー僕たち負けちゃったねー」

「いや俺たちのかちだ」

「俺、風のようにスライディングっ！」

我らがヒーローキャップが俺たちを見つけて気をそらしているワン子の隙をついて缶を蹴飛ばす。

「これで俺たち勝ちだな！」

ワンは啞然としていた。これは缶蹴りなら当たり前の戦法なんだがな。ワンは単純だから結構引つかかることが多いのだ。まあキヤップは隙があったら特攻していくのだが。

「どうしたんだ。笑って？」

「とても僕は楽しいの！」

とても綺麗な笑顔で心から笑っているように見えた。これなこのさきもきつと楽しく遊ぶことができるだろう。

そのあとドロケイやかくれんぼをして楽しんだ。やっぱり俺はこの空間が好きだ。

新しく入った小雪。入れて正解だったかもしれない。

これからどんなことが起きるだろうそれがすごく楽しみだった。

さて不真面目作家杉岡が通りま〜す!!

プロローグのあとがきでやろうと思ったオリキャラ説明を忘れてました!

というわけでご紹介!!

桜樹涼

年齢 直江大和と同じ学年

のほほんとしている子。 崩れる可能性あり

常に大型のバッグを持ち歩いている。遊ぶときにはさすがに置くが、ちなみにこれはオリキャラハーレムじゃなく直江ハーレムかも?

いやハーレム展開ないかも。

ちなみにこれは京がもうパーティINしています。

プロローグでいきなりオリキャラの名前を出してすいません!!

こんなかんじにその場のノリで進行していきます。

この話は自己紹介フェイズかな? 殆ど文もはちゃめちゃに書いたのでおかしところも多々あると思います。次から本編だと思ってみてくださいね!

真剣で私に恋しなさい！〜竜舌蘭ルートエピソード〜子供編第二話

「今日はだるまさんが転んだをやるう！　今回大和お前だ！」

「この天才軍師に勝てるかな」

「うるさいぞ。舎弟の癖に！」

「勝つてからいつてくれ」

「大和……その根拠のない自信がす・て・き（ポツ）」

「お友達で」

そんなコントをしているうちにモロ、ガクト、涼、小雪、ワン子
が原っぱに集合した。

「そういえば涼？　その鞆の中に何が入ってるの？」

「それはわたしも気になるぞ！」

モロと姉さんが鞆の中身について知りたがっていた。正直俺も気
になる

「うーん？　自分の鞆の中身はわからないんだ。自分の父親が鍵持
ってるし」

「へー、ならあけよー」

「小雪！　ナイス発言だな！　さてみんなであけるぞー！！」

「ほうおもしろそうだな、たぶんわたしたしなら一発で箱を壊せると
思うぞ」

「でも姉さんの場合中身も壊しすだろ」

「わたしは花も恥らう乙女だぞ？」

「いや花恥らつてない気がするんだが」

「ガクトは黙れ」

姉さんの稲妻のような突きがガクトの腹に命中する。ご愁傷様。

「んーでもそれならピッキングしかないよね？」

「そうだなー大和やれるか？」

「この軍師に任せろ。こんなものすぐにといてやる」

俺は常備している針金を少し先をまげて鍵穴に入れる。少しがち

やがちゃしているとガチャと音が鳴った。

「よしさすが大和だな！ ではオープン！」

キヤップがあげようとしたがあげようと思っても開かなかった。

「あれ？ 大和鍵開いたよな？」

「あけてたのにねー。どうしてだろ？ どうしてだろ？」

「でもこれほかに鍵穴ないよ」

「ほう、ならわたしの出番か？」

「姉さん加減してくれよ」

「ああ、そんなもの百も承知だ」

みんなが姉さんから離れる。壊すときに破片が飛んできたら危険だからな。

「はあ〜……川神流秘技壺割りiiiiiiii！」
かわかみりゅうひぎつぼわ

姉さんがそう叫んで鞆に拳をぶつけていた。たぶん本気で……だつて、土煙で見えなくなっているんだもん。

「はあつい本気でやってしまった。許せ涼」

「いやいや姉さん！ これたぶん涼の親父さんに謝りに行かないとダメだろうー！！」

もしかしたらこれって桜樹家の大事なものなのかもしれないのにうちの姉さんは！！

「んー別にいいんじゃないかな？ 間違つて道路に落としてそれで車が轢いたことにすれば」

「いや、涼もちゃんと考えて！ 大事なものじゃないの！？」

「正直中身知らないしどうでもいい」

「いやいや確実に大事なものだろう？ 二重のロックだったんだぜ？」

「正直どっちでもいいと思うよ」

「京はどうしてそんなに投げやり！？」

「だって自分には関係ないし……モロだつてそうでしょ？」

「いやいやそういう問題じゃないでしょー！！」

「うーん私は本人が大丈夫なら問題ないと思うよ」

「どっちでもいいーどっちでもいいー」

「壊れたものは仕方ないからな」

「京のみならずワン子、小雪ちゃんにキャップまで！！　なんで大和以外なんでそんな楽天的なの！？　これってすごくやばいことなんじゃないの！？」

今回だけはモロの言うとおりだと思っ。そういえばこのファミリ―って常識人が俺とモロだけなのか？

モロが突っ込んでいる間に土煙が消えていく。そこには傷一つ無い鞆があった。

「……」

なにこの強度。ダイヤモンドでも仕組んでるの？

「いやー壊れて無いなら大丈夫だな。さあーだるまさんが転んだやろう。いますぐやろう」

「いや姉さん謝ろうぜ」

「……zzz」

都合が悪くなると寝たふりをしてくる。なんか少しイラつく。

「まあそうだなー。遊ぼうぜ。大和その木でやってくれ」

「ん？　なにやるの？」

「おーそういえば言ってなかったな。だるまさんが転んだだ！」

「マニアックな路線だねー」

「私は影の薄さには定評がある。そして大和の背後をとって……」

ポツ

「近寄らないください」

京は本当に冗談だか本気だかが分からなくなる。

「だーるまさんがーこーろんだー」

そういつて後ろを振り向く。京がダッシュで走っていた。

「京アウト」

そう宣告する。

「ばれちゃった。さすが私のお婿さん」

やばいこの人どうにかしないと。

「皆、助けなくていいよ。私は今大和に愛の拘束されているから」

「いや大和が危険そうだから助けるぜ」

「空気読んでよキャップ」

「コントしている間にすすめるか。」

「だーるまさんがー……ころんだ」

「あつ」

「小雪アウト」

小雪が動いたのでアウト宣告をする。少しきついかもしれない。

近いのが姉さんだからな。

「もーアウトになるのはやいなー」

小雪が頬を膨らましている。小雪がここ最近明るくなっているから結構うれしくなった。馴染んでいるからこれから先も大丈夫だな。

「ぬー大魔王に我が軍の優秀な女戦士が囚われていくぞ!!」

「魔王なんかには負けないわ!! 京、小雪すぐに助けに行くからね!!」

「私はとらわれないお姫様。魔王様貴方に全てをささげます」

「なら僕も僕もー」

小雪が飛び跳ねた時少し違和感を感じた。なんか腕を上げるとき左腕が少し鈍い気がした。

「タイム!! 小雪。ちよっと腕見せて」

「え、い、嫌だよ」

「ダメだ。京確保」

「ラジャ」

京が動けないように羽交い絞めにする。俺は無理やり服を捲くり確認する。

「どうしたんだ。大和ー」

「キャップ。小雪の腕に青い痣がある。何かで殴られたか蹴られている」

「なんだって!?!」

「ちよつと大和。どけて」

俺を押しどけて腕を見始める涼。その目はとても真剣だった。

「傷痕を見るに打撲痕に切り傷。この深さと形状は彫刻刀だね。それで打撲痕はバットののような形状のものかな」

「それって!!」

「いじめにあつてるといふことか」

「小雪どうなんだ？」

「……」

小雪は黙り込む。それはそうだろう。苛められている人はのけ者になる可能性が高い。だからきつと脅えているんだ。ここから抜け出せといわれることが。

「ゆるさねえな。大和。久しぶりにやるか」

「やるなら私もいくぞ。仲間を苛めた奴はわたしが許さない」

「大和、私も助けたい」

「僕も助けたい!!」

「自分も助けたいな」

「……当然俺も助けたいと思っっている!!」

そうみんなの気持ちは一緒だった。

仲間を助けたい。と純粹に思っていた。

「だから言ってくれ。俺たち風間ファミリーは同じファミリーの一人を助けたいからな」

「大和くん……うん」

小雪は小さくうなずき苛めの状態を話した。

「私と殆ど一緒だね……」

「なおさら助けないと。大和」

「そうだな。さて決行は明日。目的は苛めをしたやつらの肅清に風間ファミリーに敵対したらどうなるか見せ付けること!!」

「さてチャンプである。俺がちと早い音頭をとるぜ!!」

「そついい、呼吸を一つして発言する。」

「俺たちは無敵の風間ファミリー!! どんな相手にも逃げない、

媚びない。負けたらいつか倍返しで利子つきでしつかりと返す。何にも恐れるな！！ 勇往邁進！！ 風間ファミリーの出陣だ！！」

いつもの原っぱで決めた初めての侵攻戦。俺たちは燃えていた。

あれ？ だれか忘れていている気が……。まあいいか。って！！ ガクトのことすっかり忘れていた。まだ気絶しているな。まあ作戦決めてから起こすか。

はいーどうもー不真面目作家代表の杉岡でございます。いや代表じゃないですが。

子供って単純ですよー暴力で解決しようとするなんて（自分で書いておいて!?!）

虐めの原因は黙認する学校、子供を猫可愛がりする親、年上を本当の意味で敬わない子供のせいですよー

注）ダイヤモンドの話をしましたがダイヤモンドは硬いですが脆い
です。

例えるならダイヤモンドをハンマーで殴ると砕けますがハンマーも傷がつくということです。

「さて今回の勝利条件は小雪の救出だぞ!」

「というわけで俺が作戦をさらに練ったから聞いてくれ」

俺は小雪に対して行われている虐めをいろいろな方法を使って調べておいた。

「これは酷いな……」

「そうだね……京並みの虐め具合だね」

「大和! 具体的にどうするの! 私は早く救いたいよ!」

「まて落ち着いてくれ。今から作戦を発表する」

俺は昨日のうちに書いといた紙を皆に手渡す。

「これは……モロとワン子は比較的危なくないけど他の皆はきついな」

「ああ、でも俺様のカツコイイ姿がどうアピールできるな」

「でも大丈夫か弟。これは」

「いいんだ。姉さん」

「そうだけ。モモ先輩。俺らは傷つくの上等ですから」

「キャップがそういうなら仕方ないな。じゃいくぞ!」

「「「おう!」」」

「きたねえ! 小雪菌が机につくだろぅが!」

「でもプリント……」

「そんなのどうでもいいんだよ。どけるよ」

僕の体を蹴飛ばした。とても痛い……次第に他の男子も集まってくる。

そして僕をみんなで蹴っていく。

「お前が一緒の場所にいるせいで空気がずくなるんだよ!」

「僕は関係ない……」

「女が僕とか言っつなよ気持ち悪い!」

だんだんと蹴る力が強くなっていく。そしてロツカーから箒や木製バットを取り出してそれで殴ってくる。

「死んでしまえよ！」

だんだんと意識が朦朧としてくる。額からは血が出ている。いつもより酷い……

「まって。この子は私の友達だからこれ以上苛めないで」

「だれだ。こいつ」

「私は椎名京」

朦朧としている意識の中。僕は京の意志の強い声を聞いて意識が遠のいた。

「小雪ちゃんは私の友達なの。これ以上は許さない」

「椎名つてどこかで聞いたことあるな」

「ああ、椎名つて隣の学校の苛められていたやつだよ」

「残念でした。俺たちは優しくも無いしましてや苛めるのを止めませんよ。ちょうどいいからお前も殴ってやるよ」

リーダー格のやつが京を一発殴った。すまん。でも救うためだから許してくれ……

「おい！ やめてくれよな。俺たちの仲間を殴るなんてよ」

「だれだおめえら！」

俺たちの姿を見てそんなことを言ってきた。おめえら悪役かよ。いや悪役か。

「俺は直江大和。そしてこっちは風間翔一、そしてこっちは島津岳人に桜樹涼。簡単に言うとな風間ファミリーだ」

「その風間ファミリーがどうしたんだよ！」

「その椎名京と小雪は俺たちのファミリーなんで仲間の救出しようとするところだよ」

「こっちのほうが人数が多いんだ。みんなで捕まえる！」

俺たちは抵抗しないでそのままつかまる。まあでも最低限の抵抗はするけど殴るなどはしない。そんなことをしたら作戦がおじゃん

だからな。

「ははは。風間ファミリーもなんともないな。さてこれ以上逆らわないようにこのファミリーとやらのリーダーにお灸をすえないとな」「キャップになにするつもりだよ！」

「そうだなーこのカッターで少し刺せばいいかもな」

「……なっ……！」

予想外だった。殴る蹴るの暴行だと思ったらカッターを使うなんて。

「大和。俺は覚悟できてる」

「けど！」

「気にするな。もともと怪我上等だっただろ？」

「俺様もこれは賛成できないぞ……！」

「ごちゃごちゃうるさいぞ！」

そういつてキャップにカッターを振り上げる。血が床にドバドバと落ちていく。しかしその血はキャップのものではなかった。その血は 涼のだった。

「ぐっ……けじめはこれくらいでいいかな？ 自分はリーダーじゃ

ないがこんだけ喰らったんだからいいよな」

額から汗を垂らしそう涼は喋っていた。

「う、うわあああああ」

刺した奴は真っ青になっていた。たぶんこのクラスにいる奴は全員顔を青くしているだろう。涼はこんな大怪我して小雪は気を失うぐらい殴られ京も一発殴られたのだ。これで正常でいられる奴がおかしい。

「ガクト！ 保健室に行つて可能なら保健室の先生を無理だったら包帯をもってきてくれ」

「キャップ。俺はどうすればいい」

「大和は生徒たちを帰らすように誘導してくれ」

「キャップはどうするんだ」

俺はキャップを呼び止めてしまう。こんなことしている場合じゃ

ないのに。

「俺はこの校長先生に喋ってくる。モロの連絡もそろそろ始まってしまっからなその前にいかないと」

ダッシュで向かっていってしまった。俺は任せられた仕事をするため青ざめている一般の生徒たちに近づき交渉をしていく。

少年たちは校長がくるまえに逃げてしまった。しかし顔は覚えていた。いる次ぎあったら報告できる。

この学校の校長はどうしてと言った顔だった。それはそうだ。俺たちの学校に借りができたのだから。

このことがあって数日たった後から小雪は笑顔を取り戻していった。

けれどもその代わりに失ったものがある。涼の腕だ。腕に大きな切り傷が付いてしまっていた。それがとても悲しかった。けれども日常生活には支障がないそうだ。

ちなみに涼の腕を斬ったやつらは姉さんがトラウマを埋めつけて倒してしまったそうだ。連絡が来ないところみると先生とかに言っていないらしい。

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエピソード〜子供編第三話（後書き）

眠い杉岡です。ねむくなって手抜きになってしまったかも。訂正はまた今度にします。

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエピソード〜子供編第四話

「涼……真剣ですまん」

「はあもういいよ」

現在俺、直江大和はどう謝るか思考していた。

原因は昨日のことにあった。

昨日俺とキャップで遊びにいった。そこまではよかった。親父さんにも怒られず元気に遊んでいた。

しかし夜、涼の秘密を見てしまったのだ。そうばれたらまずい感じの秘密だ。

それを見たせいでかなり涼は不機嫌になっているのだ。いつものぼけーっとして何でも許してくれるときと違い、今は女の子みたいにいじけている。

「それにしても驚いたな。涼がお」

「死ねやゴラあああ！」

「ぐほ！！」

涼の鋭い突きが俺の腹に思いつきり突き刺さった。

「おいつすー朝シャンは気持ちいいよなーって。んあ？ 大和どうしたんだ？」

「大和はお腹が痛いらしいって。まあ少し立てば直ると思うよー」

「ならいいな。さて今日はなにすつかー」

「今日遊べるのどれくらいなの？」

「うーん俺と大和かな」

「まあ自分の家に来てるからなー」

「お、そうだ。小雪の家に行こうぜ」

「小雪遊べるの？」

「ああ、いつでも遊べるって言ってたから」

「なら行こうかー。大和立てる？」

「ああ、なんとか」

「だらしないぞー」

「キャンプ、涼の突き凄まじいぞ」

「何言ってるんだ大和？」

「なんでもない」

「そういえば小雪の家ってどこなんだキャンプ？」

「フ、軍師が聞いてあきれるぜ！」

「さっさと答え」

「あーはいはい、あの前行った小学校あるだろ？そこを奥に行くと十字路につくから右に曲がってまっすぐ行ったところだ！」

「なんでキャンプはしってるのー？」

「ん、この前あそこらへん探検したら小雪と同じ苗字だったからさ。実際小雪入っていったし」

「へー」

「キャンプ……ストーカーの領域じゃね？」

「大和何言うんだよー俺はストーカーをするなら堂々と行ってからするさ」

「そういう問題じゃないだろ」

「まったくキャンプの行動パターンは何年一緒にいてもわからないな。」

「それじゃ早速いくかー」

「「おー！」」

今日朝起きたらお母さんが居間でクスリをやっていた。いつもは夜だけだったのにどうしてだろ？

「お母さんおはよー」

僕は明るく笑顔で挨拶をした。でも反応はしてくれない。

今日は皆と会えるかな。あ、でもみんな用事があるって言ったわけ？ 残念だなー

「小雪……」

「お母さん！ 呼んだ？」

お母さんが僕に話しかけてくれた。嬉しいな。今まであんまり話してくれなかったから嬉しかった。

「なんで小雪は笑ってるの」

お母さんが変な質問をしてきた。友達と遊んだときのことを思い出して楽しかったなと考えていたのが口に現れてたのかな？」

「楽しいことあって！ 友達もできたんだよ！」

「そう……」

お母さんとはあんまり喋れなかったけど少しでも喋れることが嬉しかった。

そしてまた頬が緩んでしまう。

「どうして笑っていられるの……」

「お母さんどうしたの？」

お母さんが僕に近づいた。僕は嬉しくてお母さんの腰にギュッと抱きついた。

「お母さんね。小雪の……その笑ってる顔大っ嫌いな」

「え……」

僕は感情が落ちてしまったように顔から表情がなくなった。それほどシヨックだった。

「見下されてるように感じるの。実の子供に。何もしない母親だと思われる感じがするの」

「お、お母さん」

「小雪。死んで！」

そういうとお母さんは僕の首を絞めていく。だんだんと強くなっていく

「お母さんはね嫌いな。小雪が。何で産んだのか分からないくらいに。いつも笑って、笑って。気持ち悪いと思ったの。だって私が酷いことしてるのに笑うんだもん。気持ち悪くしか思えない。クスリをやっている親なんて屑だな。って思われている気がして本当に嫌ねえ？ 殺してもいいかな？ ねえ？ いいよね？ 頭が痛いんだよ。小雪を見ると。なぜだかわかる？ 私は小雪がいるせいだと思う

の。お母さんが好きなら死んでくれないかしら？ 私のために。そうすれば頭の痛みも無くなる。この痒さもなくなる。頭の中にもう一人のだれかの存在もなくなるはずなの」

お母さんが段々と指に入れる力を強めていく。でも僕は笑顔で言う。

「お母さんの気が済むならいいよ」

お母さんはふと力を緩める。

「どうして笑顔でそんなこと言うの？」

「友達 ううん。仲間という家族が教えてくれたの。笑顔が大事だって。笑顔から始まることがたくさんあるって」

きつと風間ファミリーのみんなと会っていなかったら生き残るためにお母さんを『殺していた』だろう。でも僕はきつといつものお母さんになってくれると信じている。信じること。風間ファミリーにいて一番学んだことだった。

「でもあなたを殺すわ。 ああ、もしかしたら自分は羨ましかったのね。それじゃばいばい」

また首に力が入る。段々と意識が遠くなっていく。不思議と不安感は無かった。ここで死んでしまってもそれも風間ファミリーのためになるかなと思ってしまう。どうしてだろう。

「待て！ 親でも俺の仲間を殺そうとするのは許されないぞ！」

お母さんは急に首を絞めるのをやめた。自分は床に落ちた。そして深呼吸をする。

「何でキャップがいるのかな？」

「小雪の家に遊びに来たんだ！ ついでに涼と大和もいるぞ！」

「えへへー。 そうなんだ」

「やっぱり小雪は笑顔がいいな」

「だねー」

「さておばさん。警察に自首してくれないかな？」

「ええ、分かってるわ。私がないほうが多分この子のためにもなるし。でもこの子を預ける相手がいないの」

「それなら一つ心当たりがあるから任せてくれませんか？」

「ええ、いいわ。私は自首してくる。それで小雪にふさわしい母親になるうと思う。きつともう一人の私の声は小雪を守る声だったのかも知れないわね……」

そういってお母さんは出て行ってしまった。お母さん私頑張るから。

「そういえば大和当てってどこなんだ？」

「あーうん、たぶん小雪転校しないとだめかもしれないけど」

「うん、僕は転校してもいいよ」

「それならOKかな？ さて少し行くか」

「……あ、なるほどー心当たりが自分にもあるよ」

「さすが涼。なかなか察しがいいな」

「百代先輩いるかなー？」

「なるほどな！ まかせろ！」

「うむ、こんなに可愛い子ならだいじょうぶじゃわい。しかもなかなか筋が良さそうだし」

こうして小雪はあっさりと川神家の養子となって川神小雪となった。

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエピソード〜子供編第四話（後書き）

はいー杉岡っす。今回も話がめっちゃくちや……まあ気にせず行ってみよう！

自分は小雪の母は麻薬やってたんだろっつて考えています。まあ違うと思いますが。とりあえずこれで子供編は終わりです。ちなみに小雪は中学で葵と準にあうということ。次から本編ストーリーに桜樹涼をいれた奴をやります。そうしないとあのネタが使えない！って感じになるので。

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエピソード〜オリキャラ紹介

桜樹 涼

身長	167センチ
血液型	A型
誕生日	9月6日 乙女座
一人称	自分
あだ名	特になし
職業	川神学園2-F 寮暮らし
好きな食べ物	蕎麦
好きな飲み物	蕎麦湯
趣味	昼寝
特技	蕎麦打ち
大切なもの	仲間と今の環境
苦手なもの	有限実行できない人
尊敬する人	服部半蔵

「この空間ってとても安らぐよねー。穢れた自分でも受け入れてくれるから」

主人公達の幼馴染で同じクラス。風間ファミリーの古参組。

顔は男じゃなく女っぽい。のんびり喋る子。

風間ファミリーの工員。隠密行動が得意な人。

実は隠れた秘密を持っている。その秘密を知っているのは今までは大和のみだったが

あることをきっかけに風間ファミリーの女性陣にはばれてしまう。

勉強は平均点ぐらい。

悪いときは赤点スレスレ。

授業中には寝ることもしばしば。

大和からは勉強すれば50位ぐらいにはいけるのにと耳にタコが
できそうなほど言われた。

他人とも接点はつくるがそこまで親密にはならない。

風間ファミリー以外とは距離を縮めない。けれども交友関係はそ
こまで酷くはない。

昔、とある学校でキャップの代わりに腕を切られて腕にはその切
られた痕が残っている。

本人は気にしておらず、本人曰く日常生活を営めるなら問題ない
らしい。

しかし大和は秘密を知っていることと怪我をさせたこともあり自
分の未熟さと思いい気にすることが多い。

無類の蕎麦好きである。

一年前に7ヶ月ずっと学校のお昼のご飯に蕎麦を持ってきたとこ
ろワン子に怒られ普通の弁当にクラスチャンジ…

したとおもったが今でも週二の割合で持ってきている。弁当の蕎
麦はわざわざ手打ちであるためすごいこだわりでもある。

真剣で私に恋しなさい〜童舌蘭ルートエピソード〜オリキャラ紹介（後書

一気に二話更新！ って言いたいのには山々ですが無理なのでオリキャラを原作風に紹介してみた。

今日は、カーニバル当日。

「憎らしいほど、よく晴れているな」

この天気は俺達の勝ちだと教えている晴れなのか。それともカーニバルの成功を意味する晴れなのか。

今の俺には分からなかった。

まだ時間があるのでガクトの見舞いに行ってみることにした。

「よっお前も敵に捕まったり散々だったみてーだな」

「ああ、困ったもんだぜ」

「？ その割には血色がいいな」

「まあまあ」

いろいろあつたんだ。いろいろ。そう、大人の階段登る君はまだシンデレラさく的なことがあつたんだ。

「ガクトは怪我どうよ」

「直りかけてやつだ。もうほとんど問題ないぜ」

「そうか。まあお前がいない間にいろいろあつたんだが、実はな…

…今日……」

「カーニバルで決戦とか超お祭りじゃねえか」

「そ、だから俺達連絡とりにくいけど気にするな。涼はとれないと思うが」

「…そんな決戦の時に俺様は…ちくしょおおおお」

「気にするな」

「ん？ ちょっと待てよ。なんで涼は連絡とれねーんだ？」

「……捕まっている間に涼が俺のことを探しにいったらしいんだがそこから連絡ができないらしい」

「なんだって……」

「でも気にするな。まずはこっちを優先させないと」

「気にするなだど！？」

「俺は涼が絶対生きていると信じている。だから帰ってきたときにはいつもどおりの状態でいつものメンバーでお帰りっていいたいからな」

「大和……すまねえ」

「って事でビシツと決めてくるわ」

「おう、頼んだぜ！！……く、まったく。仲間も信じられねえし俺ってば情けないぜ」

金柳商店街

「あ、だから何だった？」

「カーニバルってものがあるんですよ！今夜川神は危険なんですって」

「ガキの集会ぐらいで街が危険なもんかよ」

「外を出歩かなきゃいいんだろ？」

「薬がキまつてる状態だから、何をしてくるか分かりません」

「周囲と協力しておくべきです」

「オーバーだなあ」

さつきから話をまともに聞いてくれない。みんなの協力を得ないとダメなのに！

「じゃあ外に出てよく見てくださいよ」

「……なんなんだバツキャロー」

外にはガラの悪いやつがどこかに向かっていた。カーニバルのスタート地点に向かっているんだろう。

「……むおおお……」

「今日はやけに街を歩く連中、ガラ悪いな。しかも殺気だつてやがる」

「こりゃあお前の言ったことはマジみてーだな。警察は？」

「動くでしょうが対応しきれないかも」

「自分の身は自分で守らないと！」

「カーニバルか、苦勞をしたくねえガキどもが調子に乗りやがって」

おい！ 商店街のモン集めるー！！」

「……よかった！ また一つ注意を促せた」

話を聞いてくれてよかった。これで少しどころではなく被害は抑えられるはず

「よし次を回ろうー！！ 疲れてきたけどどうせ戦闘で役に立たないんだ。こういう時こそ頑張らないとー！！」

とある屋敷

「ミューたんなにやってるんだーい」

「デニーロの改造よ」

「まったくミューたんは今日も真面目だなー。んー？ たまにはお姉さんと遊ばないか？」

「姉さん、ごめん。今日はほんとに忙しいの。デニーロをある人たちに貸しにいくんだから」

「ミューたん。お友達ができたか。お姉さんはうれしいぞー」

「姉さん。今日は茶化している暇無い」

「レーン。ミューたんがつめたいー」

「そういえばミューお嬢様どうしてデニーロの改造を」

「九鬼財閥から応援要請が来ていたの。デニーロにマガツ・クツキーというロボの探索機能をつけてって」

「そんなのミューたんじゃ無いぞーいつもなら『そんなことを私にまわさないでくれる？ 私の知力が必要なのはわかるけどね。まあ自分の尻拭いは自分でしなさい』っていつてるだろー」

「今回はそうも言ってもらえないの。川神で大きな戦い起きるから」

「いつもなら言うんですね……」

「どうせ川神大戦だろー」

「それだつたらよかつたんだけどね。今回は不良Vs街のバトルの大戦争だからマガツ・クツキーなんていう相手側に有利な兵器はきついじゃない？ 私は街応援してるし」

「そうなのか？」

「ちなみに姉さん。コレを放っておくと七浜までくることになるわ。この家まで侵入されてしまうの」

「な、なんだと。私とレンの愛の巣を壊しに来るのか!」

「姉さん。別に愛の巣じゃないでしょ。わたしたちもいるのだから

……」

「どうしたのーミューお姉ちゃんにシンお姉ちゃん?」

「夢! 我が愛しの妹よー! 私はこれから川神に行ってくるぞ」

「え、え? いきなりどうしたの?」

「というわけで南斗星借りるぞ。美鳩、車をだせえええええ!」

「森羅さまあああ! キャラ崩壊してますよ!」

「それならデニーロも持っていつて。今終わったし」

「冷静だね……ミューお姉ちゃん……」

そして、日が落ちて。

川神市、工業地帯。

ここに数百人のアウトロー達が集まっていた。

「ヒヤハツ、壯観壮観」

「これだけ集めるつてのは流石だねえ」

「……大和君つううう……」

「いい加減シャキツとしなよ辰。始まったら取り返しにいけばいいだろ」

「うん、絶対そうする」

「直江大和……あのヤロウ……ウチのメモリーカードのデータ全部消しやがって……ゴルフクラブを頭にぶち込んで頭のメモリーを真っ白にしてやるぜえ!」

「そんな事したら駄目だよ」

そんなコントをしている暇はなくなっていた。回りはもうまだかまだかと暴走しそうになっていたからだ。

「 temeエラ待たせたな板垣竜兵だー!」

「ウオオオオオオ! と怒号があがる。あたり一面が振動するように

感じられるほど響いていた。

「うはー！ こいつはすげえ皆ギラついているぜ」

「こんな奴等が解き放たれたら街は大混乱だねえ」

「見る。カーニバル開始の合図だ！！！」

前方より火が爆発するかのように燃え盛っている。

「あれは何の火か……気になるやつは見てきな」

炎上しているモノの正体は、パトカー群だった。

カーニバルを取り締まる為に終結していたパトカーは一人の男によつて壊滅させられていた。

「こ、こいつはスゲエ、パトカー全滅だ」

「おーい、凄いで警察の車が炎上している！！」

「そういうことだ！カーにはる開始の花火だな」

「お、おいおい、警察撃退したつて事は」

「もしかして本当にやりたい放題か！」

「すげえぞ、へへっ、何をしようかな！」

理性を失い始めている獣達の本能が、一気に昂ぶった。

「やっぱ効果あるな、このデモンストレーション」

「師匠モノリノリだねえ」

「ただただやりたいことをしようぜ！」

「警察も増強されてくるだろうがそれこそ後の祭りだ。盛大に祝おうじゃねえか！！」

「いいで、最高や！ 板垣竜兵最高や！！」

「うおおおー！！ 俺は自由だぞ！！」

「俺もだあ！ 解き放たれたぞおお！！」

「さあカーニバルは好きなことをやればいいがちょっとした余興を用意しておいた。」

住所はあとで言うが……この廃ビルがあるだろう」

皆に見えるように竜兵が写真を掲げる。

「その敷地内に生えてある草を燃やしてこい！ 燃やすことが出来た奴には賞金50万だ！！」

獣達がざわあつ、と騒ぎ出す。

「なんだそえや、草を燃やす!？」

「それだけで50万、マジかよ！」

「っしや俺が燃やす!!！」

「もちろんこんなの気にせず好きに暴れてもOKだ」

「こ、こらえきれない！」

「へへっ、俺はいい女歩いてたら……」

「俺は金を巻き上げたいなあ!!！」

「さあ、カーニバル！ 本格開始だ!!! 好きに暴れな!!！」

ウオオオと歓声が響いた後、獣達は市内中心部に走り出した。

「うっしや！ ウチらも暴れるぜえ!!！」

「私は大和君を奪還しに行く〜！」

「じゃあ私は辰についていこうかね」

凄まじい数の暴徒の群れが夜の街に襲い掛かる。

真剣で私に恋しなさい！〜竜舌蘭ルートEfst〜ストーリー〜武士 もののふ

1

杉岡ーさんじょー。イベントの武士 もののふ から始めちゃおう
と急遽予定変更しました。別にいいじゃん。

涼はキャップの命令を無視して大和を助けに行ったが辰に振り返り討ち
にあつて海におちそこから行方不明です。

ちなみにこのif終わったら桜樹涼ルートでも捏造して書こうかな
ーっとおもってます。

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエピソード〜武士 もののふ 2

無駄にクロスオーバーしてるところがありますので注意！

数分前、秘密基地。

「どうやら敵さん、動き出すみたいだぞ」

「おう！ カーニバルのはじまりだな」

「早速パトカーが何台もやられてた。相当な数が市内中心部にあふれ出るぞ」

「よし俺達も出陣するぞ！！」

キヤップが立ち上がる。

「全員準備はいいな！！！！」

「それぞれが大役だが、頼んだぞ！」

「武器が必要な奴は持っていけ！」

全員がこくり、とうなずいた。

「よしつ。風間ファミリー出陣！！」

「怪我也癒えた……」

「好き放題に暴れる暴徒、殲滅してくれるー！」

「この街を、好きにはさせないわ！」

「友達を守るためにも、行きます！」

「……大和が望むことをするだけ」

「気に入らない奴を、まとめて倒す！」

「穏やかな夜にするために……」

みんなが決意表明をする。決して士気は下がることが無かった。

それどころか燃え上がってすらいた。

「今回のミッションはマロードの撃退だ」

「分かってるぜ大和！ さて悪者不良どもの退治だ、行くぜ行くぜ

行くぜ！！！！」

キヤップが先陣を切り出発する。俺達も秘密基地から出陣した。

一子とクリス、由紀江は別方向へ駆けていく。

「頼んだぞ、三人とも……」

「ああ。あいつならきつと大丈夫だ。俺達は俺達で乗り込むぞチャイルドパレスへ。……いかにも葵が好みそうな場所だあそこは」
「大和、ついていくよ」

「ああ、二人ともよろしく。……待ってるよ、葵冬馬……」
「皆……頑張ってるね」

「僕はここで情報を纏め上げてるから……」

「お前は昼間、凄く頑張ったじゃねえか。見直したぜモロ」

「え……」

「だから今はここにいな」

「う、うん」

長い夜の、はじまりだった。

チャイルドパレス、最上階劇場の間。この施設が、冬馬達の基地になっていた。

ここがオープンされれば薬を積極的にまくつもりだった。

「……見るよ。火の手があがってるぜ。どうやら本格的にはじまつたみたいだな、カーニバル」

「ここは静かなモノですねえ」

「俺達しかいないからな」

「竜兵はさぞはしゃいでいるでしょう。本能のまま暴れることが彼の望みでしたからね」

「街は今、大混乱だろうよ」

「……本当だ。火の手がもう……ということは大和君も動き出してるでしょう」

「準。護衛をお願いしますよ」

「あの黛由紀江がきたらどうするんだよ」

「釈迦堂さんがいますから」

「ジョーカーはジョーカーで対応ですよ」

「俺達には三枚のジョーカー……もう二枚は？」

「一枚は調整にもう少しかかりそうです。もう一枚はタイミングを

現地に任せてます。効果的に動いてくれるでしょう。さて大和君はどう攻めてくるかな、ふふ」

「楽しそうだなあ若」

「準と小雪は楽しくなさそうですね」

「……あまりな。だが若が決めたことだ。ついていくぜ」

「僕はあつちも大切だから……でも僕も冬馬についていくよ」

「二人ともありがとうございます……群集心理の貴重な実験テスト。文字通り高みの見物といきましょうか」

「……ああ」

多馬大橋。

大和たちの秘密基地目指して、多くの暴徒が橋に殺到していた。

「ひやははは！ 50万円だ50万円！」

「あの廢ビルはこつちだな！」

「俺が燃やしてやるぜ！」

我先にと、橋を渡ってくる。暴徒達。橋の上に登り、それを眺めるのは。

「なんとという浅ましい者たちだ。まさに獣だな……」

そう言いながらも、クリスは敵を通した。数十人…大勢の獣達が橋を通過していく。

どうせあの獣達に竜舌蘭は燃やせない。

「ふふふ、待つててね大和君」

「辰、アンタ本気で惚れてたんだねえ」

集団に遅れること一分。無人の橋をのんびりと板垣姉妹が渡ってきた。

「本当に秘密基地を目指して来たな。自分に課せられた使命は三姉妹のうち一人を撃破すること。三姉妹のうち二人いるが構わんつ！」

クリスが颯爽と飛び降りる。

「ん！ なんだ！」

「クリステイアーネ・フリードリヒ推参！ 悪逆無頼の輩を、正義の剣で断罪する！」

「……くくっ、今日は武器ありか。面白いじゃないか」

「こらー。私は大和君に会いたいんだーっ！ ここを通してっ！」
辰子が素早いタツクルを仕掛けてきた。

「遅い！」

突っ込んできた頭に、クリスが膝をぶつける。

「う。……っ、う、うああああ痛いよ〜〜」

「ごろごろと辰子が転げまわった。

「痛いよ、アミ姉ええ〜ううう〜」

「あーあー可哀想にねえ辰。見てな。仇をとってやるよ……」

「再戦したいと思っていたぞ板垣亜巳」

「クリス……偶然さね、私もさあ！ まず、アンタを戦闘不能にしてから爪をはがしていくとするよ。武力を奪われたアンタを野獣たちの中に放り投げる。するとどうなるかねエ？ くくくく……！！」
「で？」

クリスは凜とした状態を崩さず亜巳に向かいレイピアを構える。

「ん？」

「ネチネチとうるさい物言いは終わったか？」

「む」

「覚えておけ板垣亜巳……」

一つ呼吸をしクリスは発言をする。

「騎士は、くだらない脅しで己を曲げない！」

「ふはっ！ 清々しいまでに一本気だねエ。面白い、行くぞクリス！ 棒を受けてみな……」

「来い……！！ 板垣亜巳」

クリスと亜巳が同時に走る。勝負が始まった。

駅前、金柳街。

ここも20名程度の獣が押し寄せていた。

「へへへ、金目のものいっぱい商店街だ」
「さあ金をとるぞ金をとるぞ」
「ウチはショーケースを片っ端から割ろうつと」
「っしやあ！ この店デストロイ！」
「させるかバツキャロー！ ダイナミック本屋チョップ！」
「うぐわー！！」
「ああん？ てめーなんだコラ！」
「本屋ガードオ！！」
「金柳街自警団、参上！！」
各ショップの店員達が団結していた。
「うお、結構な人数じゃねえか」
「俺達の商店街を、やらせはしねーぞバツキャロー！」
「こ、こいつら……」
「てめえらノリがわりーんだよ！」
「うぐえ！」
「あんな中年のオッサンどもなんかにはビビってんじゃねー！ さあ
てウチとゴルフやろうかオッサン達」
「ちよつと待ったああああ！！！」
「お？」
「川神院・川神一子おおお！！！！ 参・上！！！」
「うおつとお！！！」
一子の奇襲を紙一重で避ける。
「いきなり斬りかかるとはイキがいいぜ！」
「アタシの使命は、板垣姉妹を一人撃破！」
「ああん？」
「大和の言うとおりの物欲に釣られて商店街に現れたわね」
「よくわかんねえけど、とりあえず死刑だな」
「ゴルフクラブを手に握り構える。
板垣天使だ！！！」
「……えんじえる……」

一子は笑えが堪えきれなくなりプルプルと震え始める。

「そこにひっかかるなボキヤー!!!」

天使はゴルフクラブを振り回してくる。

「うわ、凄い手数だけど……動きが雑なのよ!!!」

呼吸を一呼吸し一気に間合いを詰めて思いつきり薙刀を薙ぐ。けれども天使はまた紙一重で避けてしまう。

「うおっ!?!」

「まだまだっ!」

追撃とばかりもう一度深く鋭く、足を薙いだ。

「痛っ、斬られた!? わっ、足から血じゃん」

「これは真剣の薙刀よ。仲間や街の人たちを危ない目に合わせる人には容赦はしないわ」

「へへっ、面白いゲームだぜこいつは!!!」

「ゴルフクラブじゃ勝てないわね!」

「ところがぎつちよん! そうでもねえぜ!!! じゃーん、流水の構え。Uフォーム!!!」

天使はゴルフクラブで構えをとった

「だから……何よ!」

一子は自慢のスピードを生かして斬りかかったがその斬撃を天使はゴルフクラブでいなした。

「食らえ天使のような悪魔の蹴り!」

「よつと! 技名が長いのよつ!」

反撃してきた天使の蹴りを後ろに避ける。

「薙刀あ!!!」

「いなす!!! そして蹴る!!!」

金属音がなり薙刀がゴルフクラブに天使から何も無い方向へとすべる。天使は一瞬の隙に蹴りをまたお見舞いする。

「あつっ……かすつたわ」

この範囲はさすがに避けづらく一子に少しかすってしまっ。

そんな一進一退の攻防を繰り返していく。

「そのゴルフクラブ：振り回すものじゃなくて：本来は攻撃を捌く用ってトコロね？」

「あつたりー。だからゴルフ護身術って言うなのさ」

「へええ色々勉強になるわねえ」

「相手がダウンしたら強烈無比な追い討ちあつけどな。頭をボールに見た立てて、それで撃ち抜く」

「うはっ。痛そうねえ……」

「おうリアルゴルフでチャー・シュー・メインだぜ」

天使はケラケラ笑っていたのだがいきなり一変して真面目な顔になる。

「……それにしても、川神一子とかいったな。師匠（釈迦堂）から聞いているぜ？ 努力家だつて」

「うはは、照れるわねえ」

「まあウチに言わせて見ればさ。努力しまくるのも、なんか汗臭くてダセエよ」

「……なんですって」

一子はそのセリフを聞いて苛ついた。自分の行動を一言で否定されたからだ。

「そんなのより簡単に強くなれる方法知ってるぜえ」

天使が、ポケットからカプセルを取り出した。

「一気に片付けるぜええ……ごくんごくん」

「ちよ、何を飲んでるのよそれ」

「興奮剤みてーなモンだ、ぜえっ！！」

「うわっ、凶暴性が増してる！？」

「ヒヤッハー！ エンドオブワールドだぜえ！！」

「こんにやる！」

薙刀を右の足に目掛けて振り下ろす。

「ハイになってるウチにはそんな斬撃きかねー！」

鋭い角度で入った薙刀を天使はゴルフクラブではじき返した。

「うわぁっ……」

「な？　これが簡単に強くなれる方法だぜ。ダメ押しをしてやるぜえ、薬追加、んむ、あむ」

「こいつ……」

「ごくんっ！　ヒャッハー！！　さらにレベルアップ！！」

「あぐっ！！」

天使の猛攻で、一子は蹴り飛ばされる。

「オラァー！　観念しろやハリガネムシがー！！」

さらに天使は嬉々として迫ってきた。

川神市駅前。

「高そうな車だな！　ぶっ壊してやるよ」

「どっかに姉ちゃんはいないのか！」

「お。おいアレ……！！」

「凄い数だ、まだまだ応援を呼べ」

集会を察知していた警察は多くの人材を投入していた。

「ちっ、中心部にや警察多すぎだな！」

「もっと散ろうぜ！！」

多馬川沿い

奴等市内に配備されている警官の数に驚いているかな

「いい通報だったな。相当、分断できたと思うぜ。後はそれぞれの

戦いだ……」

「私達はこのままチャイルドパレスへ！」

「あああ！　いい男がいるわよお」

「もらおうか、アタシ達世田谷レディースが」

「メスはどいてなー！　オスは裸に成れ！」

「女の暴徒かよ！」

「一人一殺！」

「せーの！」

「はっ！！！！」

三人横とびで、同時に蹴りを繰り出した。

「はおぐう！」

「ひぐう！」

「いぐう！」

マロード兵達　世田谷レディーヌは綺麗に吹き飛ばされた。

「心強いね」

「私の使命は大和の護衛だから。それにしても自ら敵地に乗り込む軍師って……」

「葵冬馬は俺自身でお仕置きしてやりたいからな」

「それでいい。敵の頭を潰さないと。……とはいえ削れる暴徒は削っていくぞ！！」

頼もしい両壁に護衛されつつ俺は敵地を目指す。

イタリア商店街。

「キヤー！　何なのこの人たちはー！」

「うえええん、ママー！　ママー！」

マロード兵たちが逃げた親子を捕まえる

「おっ、いい女じゃねえか」

「子供の前で母親といたすつても満更じゃねえ」

「やめろよ！　ママを放せええ！」

「うっせぞガキ！！」

「うるさいのはお前達だ！　プレミアムキック！！」

「おごー！？」

「なんだてめえらは！」

「川神学園有志による、街角警備隊A班だ」

「お前達の好きにはさせないぞ」

暴徒達に数十人の学生が立ちふさがった。

「準備してやがったのか？」

「師岡っていう人が必死に説いてまわってね！　もしもの事態にプレミアムに備えてたってわけ」

「こつこつとコロで内申あげて目指すは生徒会長！ んープレミアムな野望だわ」

「なめてんなよ！」

「いえ、なめるわ」

小杉が暴徒の拳をつかみ、ひねりあげる。

「いてええええ！！ つ、つええぞ！？」

「お前らがダラけてる時、私はスポーツでプレミアムに鍛えていたもの！」

「一対一ではそこらの雑魚に負けるきしねーな」

「プレミアム金的！」

「ぎゃああああ潰れたああああ」

「さあ全員取り押さえてしまおうっ！」

「仕切るな一年生が！！」

数と質両方で勝る街角警備隊が、次々と暴徒達を鎮圧していく。

そこへ

「ほう、これはこれは獲物がたくさんいるな」

「あいつは…九鬼財閥の警備ロボ！」

「本来は俺達、川神学園側の味方のはずだろ……敵に操られているつてのはマジらしいな」

「さあ、存分に斬ってくれるわ！」

ヴォンと音が鳴りビームサーベルが展開される。それが街角警備隊に振り下ろされる

「！ おい何かが突っ込んできたぞ！」

その刹那。

「させませんっ！！」

「むっっ！！？」

黛由紀江が凄い速度で割り込んできた。

「私の使命はマガツ全機の撃破！」

「貴様……何者だ」

「通りすがりの正義の味方だ、覚えておけ」

「てめえかつこいいセリフいいやがつて！」

「こらー二機とも静かにしてろつて！」

「武士娘センサーに反応。面白い相当つかえるな」

「黛由紀江、お相手します」

キーン

「勝負だ！ 歴史に残る決闘になるだろう……あれ？ 私の視界が、
反転している？」

「すでに斬らせて頂きました」

「なっ……にい！」

マガツクツキーが爆発し壊れる。その破片も他の人が当たらないように由紀江は刀で落としていた。

「ええっ、あ、あんなプレミアムに強かったの！？」

「次はあつちだよ、10時の方角！」

「おう間違いないぜ！ 俺様のセンサーにもピンピンきてるからな」

「頼りになるリーダーです」

「いやあ照れるな」

「俺様がセカンドオピニオンしてるしな」

「なにやらカオスな空間だぜ」

「全機撃破までまだまだ……急ぎます！」

「あ……！ 行っちゃった……」

「まあでも、こっちは何とかなりそうだよかった」

「もう一つの警備隊、Bチームは無事かなあ」

川神学園。

ここもまた、暴徒に襲われていた。だが学年有志達の街角警備隊B班も詰めていた。

単車に乗った暴徒達が徘徊している。

「俺は学校が嫌いなんだよ……ブツ壊してやる」

「俺の命であるバイクで廊下を走ってやるぜ！」

バイクを走らせようとした瞬間何かが飛んできていた。

「うぎゃあ！！ バイクがパンク!?」

「おい、どうした? うわ、矢による狙撃!?」

単車は次々とタイヤに矢が当てられパンクし、機能を失った。

「よし、人には一回も当てなかったわ!」

「うむ、見事な狙撃だったぞ、さすが主将だ」

「先生も、さすが顧問です。でも今度は直接学園に乗り込んできますよね」

「おそろくな。私は近接戦闘に備えよう」

「じゃあ私は…… 援護を」

「ドキドキしてきたけど、頑張らないと。みんなの学校なんだから! でも本当にこんな暴徒が来るなんて……」

「薬でハイになった暴徒が来るんです! 今、話題になっているユートピア中毒者ですよ! 自分達で守る意識を持たないと!!」

「…… 師岡君の言うとおりに備えててよかった……」

「ちきしょう、直接乗り込んでやる」

「俺のバットで色々ぶっ壊してやるぜ」

「生臭いと思えば獣の群れか……」

「なんだてめえは、バットで頭力チ割るぞ!」

「果たして君が持っているのは本当にバットかな? ちくわではないのかね?」

「何を馬鹿……うわああ、本当にちくわだああ」

「生徒会長、敵を無力化したぞ」

「骨法部 DE キルゼムオール!!」

「何なめられてんだい、やっちまいな!」

暴徒と、骨法部達が正面からぶつかりあった。

「街角警備隊B班、押し返せ!」

たら、変人集団だけどね……」

各国最強の精鋭集団に暴徒が敵うわけがない。あっという間に、暴徒を制圧してしまった。

「な、なんだこいつら余りに強すぎるぞ」

「ロシア サイキョウ オレ サイキョウ！」

一方、少し離れたところには女の戦いも行われていた。

「アタシらケンカ上等愚連隊！」

「川神の女達に負けるかよ！」

「さあどっからでもかかってきなあ！」

「面白い系！ アタイがブッコロス系で」

「んだてめえ、このブサイク！」

「毒霧！！ プシユウウー！！」

「ぎゃ、ぎゃああああー！！」

「てめえ、ぐはっ」

セリフを言い終わる前に羽黒の豪快なリアットが決まった。

「レスラーの娘……舐めてんじゃねえ！」

「やべっ、逃げないと」

「にがさねえ系で！ つかんだ系で！ ジャーマン！！」

「おふっ……」

「イエース！ アイムブルーサイクロン！」

「アンタ、なんだか活き活きしてるわね」

「アノ ハグロ トカ イウ オンナキレイ！」

「それはどうでしょうかネー」

「私はニヤニヤたんが可愛いと思うな」

「神の目はロリコンか、天罰あれ」

「川神院も今頃大変だねー」

川神院には押し寄せてくる暴徒がいない。商店街にいる精鋭集団を通過できるものがないためである。

かわりに多くのけが人が搬送されてくる。けが人を民間ボランティア対処に当たっていた。

とある高速道路のパーキングエリア

「ひゃっはー！ 車なんて叩き壊してやるぜ！！」

「へへっへ、金も根こそぎ奪ってやるぜ」

暴徒が自動販売機を壊したり車を壊している。

「あわわわ、レオ！ これどうなってるんだ！」

「俺が知りたいよ。フカヒレ」

「おーい！ レオ！ そんなこと言ってる暇ねえーよ！ さっさと逃げねえと！ 僕達の頭がザク口のようになっちまうぜ！」

「カニも落ち着け。しっかしどうすっかな。この状況」

「なんとか出来ないかスバル？」

「おいおいレオ。これじゃさすがに不可能を可能にする俺も無理だぜ」

スバルはここにいた人たちを暴徒に教われないよう逃がしていた。

。そして全員逃げたのでこちらへ合流してきた。

「おいあそこに人がいるぜ！！」

隠れていたがついに見つかってしまったようだ。

「覚悟はできてるだろうな？」

暴徒が二人近寄ってくる。

「ちっ！ レオたちは逃げろ！ 時間は俺が稼ぐ！」

「すっすすすすスバル」

「ボクたちがそんな薄情だと思うのか！ そもそもスバル！ これは死亡フラグだぜ」

「スバル」

「なんだレオ」

レオはいつにもまして真剣な目をしていた。

「椰子は逃がしたんだよな」

「ああ、正直大変だったんだがな。『先輩が残るなら私も残ります！』って言うこと聞かなかったんだぜ」

「すまん」

「あー、レオ熱血モードにはいちつたの？」

「そーみたい」

「スバル、俺とお前で時間稼ぐ。フカヒレとカニは逃げてくれ」

「おいおい、そこまで言われちゃったら俺も残るぜ」

「そうだよーレオとスバルが残るんならね」

「おい！ 話し合いは終わったのか！！」

「いえいえーなんでもございませーん」

そういうとフカヒレは暴徒に近寄っていく。

「近寄ってくんやサル！！」

フカヒレは思いつき顔を殴られそうになる。それをスバルが間

髪で止めた。

「すまねえが仲間をサル扱いしないでくれねえか？」

「く、こいつはできるようだな」

「レオ！」

「てりやあ！」

レオは相手の背後をとりバットを思いつき首に振り下ろす。

もう片方は相方がやられているのに気がつきそっちを向く。しか

しその隙が命取りだった。

カニの背後からの踵落としを食らい追撃にスバルのパンチが思い

つきり入る。

「よし、行くぞ」

俺たち対馬ファミリー四人はここから脱出するために店から出たのだった。

秘密基地前。

竜舌蘭を燃やして金得ようと、色々な道から約百人の暴徒たちが殺到した。

「50万だ！ ここを燃やせば50万円だ！！」

「俺が燃やしてやるぜ！！」

大和達にとって、大切な竜舌蘭だ。

なので直江大和は。

「……？ なんだこの地面にひかれている線は」

「それはな、この世とあの世の境界線だ」

最強の武神をここに配置して、鉄壁の守りとした。

「踏み越えた奴は、痛い痛あゝいお仕置きが待ってるぞ」

「か、かかかか川神百代！？」

「おい、怪我で動けねえんじゃねーのか」

「なるほど、敵さんわんさか来て退屈じゃないな。私の使命は、基地の防衛……果たして見せよう」

「び、びびるな！ こっちは百人もいるんだぞ！」

「そうだけ、だいたい女一人にビビれつかよ」

「……やるか！ うおおおお！！」

百人の暴徒達は線を越えて攻め込んできた。

「はっはっはー！！ いいぞ嬉しくなってくる！！ …… 葵冬馬、どうせ高みの見物をしているのだろ」

百代は気を手で練っていた。禍々しい黒いオーラを球状にする。

「だったら見ておけ！ 私からの反撃の狼煙の打ち上げ花火だ！」

溜めた気がさらに大きく膨張していく。それは両手で押さえきれぬまでに大きくなっていく

「か・わ・か・み……波ー！ー！！！！」

「え……光が広がって」

「なんだ、なんか綺麗だな……」

百人は、何が起きたかを知らぬまま。百代の閃光に焼かれ、炭のようになっっていた。

「……けふっ……」

そのまま全員が倒れてしまう。

「うわぁ…ジエネシスとかレクイエムとか呼ばれるレーザーってこんななんだろうな」

「ンン…気分爽快だ、ま、一生悪夢は見るだろうが死ぬはしなないと
思うぞ、手加減したしな。……ま、だが、私は今回あくまでディフ
ェンス……ここを動かん。竜舌蘭と基地を守るからな。基地の中に

いるモロ口も、な……つまりオフエンスが攻めないと勝てないぞ。
ワン子達……頑張れよ！」

「綺麗な光ー。モモ先輩かなー」

「なあ若。最近父親と会話してるか？」

「まさか。嫌いですから……嫌えば嫌うほど、自分も嫌いになりま
すが……ね」

「若がこれだけ実績あげてりや褒めてくれると思うぜ」

「……でしょうね。しかしこれで褒められても嬉しくもなんともあ
りませんが」

「あ、おじさんー」

「よお、楽しんでるかい大将」

「釈迦堂さん……」

「皆は外でキヤツキヤツとおおはしゃぎだ」

「どうやら、敵の主力はここに来ないようです」

「なら俺も行かせてもらうぜ」

「はい、そちらも攻め側でどうぞ。さらに攻めてあげてください。

貴方はショーカーの一枚目。だからこそ敵のショーカーを止めても
らいます。マガツを倒して回ってる黛由紀江をお願いします」

「おうよっ、あれは元から俺の獲物だからな。じゃ、ちよっくら行
つてくるぜ大将も楽しめよ」

「楽しんでますよ、私は……」

「……また、大将はそういう顔をする……そのすさんだ瞳……そっく
りだぜ俺の子供の頃に」

「お互い、ほんとろくでもない境遇ですな」

「まったくだ。一緒にやり場のない怒りをぶつけてやるさ……ヒヒ。
利害も一致してるしな……」

釈迦堂はチャイルドパレス屋上から見を降り出す

「それじゃ行ってくるぜ」

そして彼はそこから飛び降りた。

「はーっはっはっはっはっはっ、楽しくなってきたあ！」

戦える喜びに震える、獣の方向が夜空にこだまする。

「カオスの塊が放たれた…街はさらに混乱しますね……だが、
釈迦
堂さんも私の仲間…ご無事で」

真剣で私に恋しなさい〜竜舌蘭ルートエピソード〜武士 もののふ 2

ほぼ本文転載になっちゃうのは文章をいじっています。

まあオリキャラだせば早いのですがオリキャラはもう…

それではーまた今度ー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8883k/>

真剣で私に恋しなさい！～竜舌蘭ルートIfストーリー～

2010年10月12日07時16分発行